
残り1つの命

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残り1つの命

【Nコード】

N7323M

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

星を探查する使命を負って、宇宙を旅する1隻の航宙機。

ひとつの惑星で命の灯火が消えようとしていた。その臨終に立ち会った、その昔は生命だったクルー達の淡々とした作業を通して、文明のはかなさを感じていただけたら…

（前書き）

久しぶりのSFです。

これが「『祭』への前哨」となれば良いのですが…。

それは本当に稀なことだった、惑星への上陸許可が出るのは。

そして我々は今、静かに地上に降り立った。このポイントが一番近い最適な場所だった。

我々が目的の場所に辿り着いた時には、恒星がトップリと地平線から姿を消していた。

「ここだ、ここから入るぞ」

我々は、やっとの思いで見つけた入り口からゆっくりと侵入した。

我々は判っていた、この惑星が既に滅んだことを。正確に述べるならば「この星の知的生物が」だが。それは、この恒星系が精査観測領域に入ってからすぐに判明したことだった。我々は、非常に楽しみにしていたのだが…。

我々のストリンガー・スコープは、そこまでお見通しだった。

我々の宇宙機はその恒星系に照準を合わせてコースを変更されてしまったので、その惑星にも立ち寄るしか仕方がなかったのだ。

しかし、スコープで全てが解る訳ではなかった。星系に足を踏み入れた途端にバイオ・ソナーが反応したのだ。その時点で減速が決定され、フィールドストリングエンジンの逆位相フェーズによって、惑星周回軌道に入ったのだった。バイオ・ソナーが最初に反応した時はいくつかのバイオ・ソナー反応があったのだが、惑星に降りるまでの調査段階で手間取り、バイオ・ソナー反応が残り1つになってしまったのだ。その経緯から無理だろうと思っていた、まさかの「上陸許可」がアツサリと許可されたのだった。

惑星はひどい状態だった。大気圏内には、自然値を大きく上回る放射線が充満し、今後かなりの時間、このままの状態が続くだろう。それに、大量に漂う微粒子が恒星の光を遮っていた。大規模なエクスポージョンが複数回、成層圏で発生したのだろう。惑星が一樣

の色に見えるのはそのせいだった。

特別製の耐放射線・防塵スーツに身を包んだ我々は、静かに惑星へと降り立った。かなり細かい塵が分厚く降り積もっていて、我々はその塵に埋まりながらの行軍となった。航宙機からのバイオ・ソナーのデータに最新の注意を払いながら、分厚い塵に覆われた四角い奇岩の林を抜けて、バイオ・ソナーの反応点に至る経路をスキャンした。航宙機の惑星スキャンと、我々のホリゾン・スキャンとを照合して、航宙機のATが”ダンジョン・マップ”を作成した。

「この近くだ。表示に示された”入り口”をスキャンだ」

我々は、SL立体スキャンを試みた。

「こつちだ」

左手の、それ程高くない、塵に埋まった四角い奇岩の中に、その入り口は存在した。

「どうやら、この”奇岩”はほとんどが空洞のようだな」

四角い奇岩の側面には、規則正しく四角い穴が開いている。

その1つから奇岩の中に進入した。

「どうやら、これは『シエル』のようね」

「ここで暮らしていたというのか」

「他の奇岩もこうなっているのだろうか？」

「だとしたら、ここは『ポリス』だったと？」

「そうかもしれん」

航宙機から、更新されたダンジョン・マップが送られてきた。それには、赤い矢印が描かれていた。

「どうやら、この奥に進めと言うことらしい」

部屋を出て通路を右に進み、もう一度右に曲がって1エードと5エルグ進んだところで、左手に下層部へと降りていく空間が現れた。

「この小さな段々はなんだ？」

「これは『ステップ』という、歩行生物の所産ね」

「特に2速歩行のヤツじゃないのか？」

「あら、よく知ってるわね」

ダンジョン・マップは、階段の下方方向へと矢印が書かれていた。

「とにかく、これを下に降りるとの指示だ」

「これは我々にとっては困難だな」

「この急な角度とこの狭さが問題よね」

我々は、フローターを使うのを止めて、ウインチクライミングでここを降りることに決定した。フローターはエネルギーを消費が激し過ぎる。エネルギー温存を考え、アンカーボルトを側面に打ってワイヤーを伸ばして降りていくことにしたのだ。多少手間が掛かっても、今後何か起こることに備えた方が得策だと、我々も航空機も判断したのだ。

30回ほどのウインチクライミングを繰り返したところで、赤い矢印は、やっと水平を示した。

「アンカーの矢尻がダメになる前でよかったよ」

「ホントだな」

ここまで来ると、塵の影響はほとんどなかった。白い壁面には照明が点いていた。

「結構、進化しているわね」

「シリコンの発光が。低消費だから今でも点灯しているんだな」

「動力は不明だが」

「いや、この地下深くにごく微量だがNC反応がある」

「分裂だわ、この反応！」

「大時代だねえ」

「自然界にない物質が存在するかもしれないって訳だ」

我々は議論好きだが、ついつい時間を費やしてしまう。

議論が始まるうとした、その前にATからの受信機にアラートが発せられた。

「航空機から連絡よ。『迅速に行動せよ。反応が弱まっている』って」

確かに、バイオ・ソナーの反応は弱まっている。我々が奇岩に進

入してから10%ほど、反応率が低下している。我々が近づいているのにも関わらず。

我々は無言のうちに議論を止めて、指示通りにダンジョン・マップに従って、進行を再開した。やがて、行き止まりになった。通路一面の大きな扉で塞がれていて、中央にパネルが備え付けられていた。

「嚴重な施錠だ。この扉はかなり厚い」

「PBと軽液体による放射線遮断が施されている」

「厄介だな」

「我々は、軽水が苦手だからな」

我々は、方策を探すべく立体スキャンを試みた。

「どうやら、扉の軽水は独立しているわ」

「抜き取れば何とかなる量だし、我々にも影響はない」

メーザーで扉の一部に孔を開け、気化させつつ扉を破こうとした。だが、予想以上に扉は厚いものだった。パネルの解析も同時に行い、施錠を解除したようだった。

「ロックを解除したけれど、動力が動かないのよ」

開けられないことが不思議でならないメンバーが口火を切った。

「こちらから供給すれば？」

ロックを解除したメンバーが首を横に振った。

「フィールドじゃなくて『マシン』なの」

「エネルギーは変換して供給できるし、高が知れてるわ」

「古典的な『歯車』が動くかどうかが疑問なのよ」

だが、躊躇してはいられない。バイオ・センサーの反応は徐々にだが、確実に弱まっている。

「やってみてくれ。話はそれからだ」

「分かったわ」

パネルが通電したようで、いくつかのランプが光り、それが全て中間色に変化した。「ガコーン」と大きな音が通路に響いたと同時に、軽い振動が通路全体を揺さぶった。そして、扉が左から徐々に

ゆっくりと開き始めた。

だが、ほんの少し、角度で言うと10度程開いたところで扉の動きは止まり、甲高い音が遠くから響いていた。

「ダメ。シャフトのベアリングが昇天したわ」

「空回りするだけよ」

辛うじて、手が入る隙間は確保できていた。

「ここからは力技で大丈夫だよ」

そう言って、オペレートしたメンバーを労った。

「アンカーでスパイクだ！」

一斉に扉にアンカーが打たれ、全員で足場にスパイクを立てて後方へ引つ張った。なかなかビクともしなかった扉だったが、大きな破壊音と共に急激に大きく扉が開いた。

「機関部が壊れたわ……」

「仕方ないよ、我々には中に入るのが使命なのだから」

扉の向こうは、全く違った世界だった。全く、放射線は進入していなかった。

「退避場所のようだな、災厄から逃れる為の」

「恐らく、そうだろう」

空気中には、外界と違う微妙な匂いが漂っていた。そして、通路には時々黒いシミが付着していて、その下には干乾びたものが横たわっていた。更に、奥の区画へ進むと干乾びた物体が多くなった。

「これはなんででしょう？」

「ゴミにしては無造作すぎる」

「もしかして、これは……」

「ああ、たぶん」

「ま、まさか」

「そう、その”まさか”だ」

我々のダンジョン・マップに最終目的地点が表示された。緑色に輝くその点は、ゲージから推測すると、その命は風前の灯だった。

この先の通路の角を左に曲がると目的地点だった。

通路を左に折れると、そこには機械が作動していた。” p i、p i、p i、p i、p i、p i、p i、p i、p i、p i、” と正確な音を刻んでいた。そこにはカプセルがあり、その中にはベージュの生物が横たわっていた。

我々は、恐る恐るカプセルを覗き込んだ。

「2足歩行の生物だ」

「ずいぶん小さいのね」

「幼生かもしれないよ」

「炭素系の生物だな、それも窒素コア系？」

「キレイと言えばキレイね。体毛が無くて」

「体毛の無い生物は珍しいんじゃないのか？」

しばらくの間、我々は観察した。機械のスクリーンをしていたメンバーが言った。

「どうやら、重篤な病のようね」

「このメデイションによれば、遺伝子の乱複製の病気みたい」

「体中の臓器がこれにやられている」

「データの抽出は完了したわ」

我々は、全ての観察を終えてしばらく、この生物を見つめた。

「コンタクトは難しいな」

「ええ、ほとんど無理です」

「残念だわ」

全員がため息をついた時、その生物がガクガクと動いた。

我々は色めきたった。

だが、同時に生物の後ろの機械がアラーム音を発した。生物はまた静かになり、アラーム音も止まった。

「臨終よ」

「そうか、死んだか」

我々のダンジョン・マップから緑色の点が静かに消えた。

我々は、そのままの状態です。ただ、あの「大扉」だけは丁寧に閉ざしておいた。

上陸艇に戻った際の放射線測定で、全員のサイボーグ・ボディに過度の放射同位が測定された。それほどにヒドイ核放射能が残留していたのだった。

その為、軌道上にて各メンバーのコアのみの回収となった。航宙機に戻ったメンバーもその影響を考慮して古いコアから新しいコアに移植され、心機一転していた。

メンバーの2人が、展望ラウンジで話をしていた。

「面白かったわ」

「僕はそう思わないな」

「どうして？」

「惑星に芽生えた生命の断末魔だった」

「ふーん」

「そして、貴重なサンプルを得た。それだけだ」

「つまらないわね」

「じゃあ、何だと言っただ？」

「あの生物の生き生きした姿を考えるとね、ワクワクするわ」

「そんなもんかな」

航宙機は、既に恒星系を離れていた。

二度と立ち寄ることもないだろうあの惑星は、もう電磁波でも見えなくなっていた。

（後書き）

ハードなSFを書きました。

ご意見や感想などがありましたら、是非お聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7323m/>

残り1つの命

2010年10月8日13時06分発行